

●イントラネットは流行るか●

米国を中心にイントラネットが急速に普及し始めていると言う。イントラネットとは何だろうか。インターネットとはどう違うのか。日本でも普及するのだろうか。

●イントラネットとは

イントラネットとは、インターネットで使われているWWWなどのツールを企業内情報システムとして利用することを指している。たとえば、議事録などの社内文書やEDPシステムの閲覧をWWWブラウザでやろうというのである。確かに、コンピュータの機種やOSに依存しないインターネットツールなら、どんな企業のどんな環境にも利点がある。コロンブスの卵のような発想だ。

ところで、イントラネットの「イントラ」は「～内」のことを意味している。インターネットがネットワークとネットワークの「間」のネットワークだったことを思い出せば、両者の違いは「内」と「間」にある。では、何の「内」かという、企業の内である。イントラネットでは企業という単位が強く意識されている。これは、概念モデルに近いインターネットに比べると、かなり具体性が高い。

というと、イントラネットはインターネットとまったく別のもののように聞こえるが、実際はインターネットツールを使うわけであり、とくに抑制しなければイントラネットでやり取りされる情報は、そのままインターネットを介して世界じゅうからアクセスすることができる。この点が、従来からあるLANと根本的に違い、期待が集まる点だ。つまり、イントラネットはインターネットとシームレスに接続された企業内の情報システムであり、インターネットの最も末端に位置する情報発信システムと言うこともできる。

イントラネットのわかりやすい例として、フェデ

ラル・エクスプレス社のシステムがある。同社は昨年より、注文を受けた荷物の現在の状況を、インターネットのWWWを利用して顧客が検索できるサービスをスタートさせた。このサービスにより、顧客は自分の荷物が今どこまで配送されたかを確実に把握することができ、逆に同社としては電話による問い合わせを減らすことができる。この例は、同社がすでに運用していた社内の業務用の配送データベースをインターネットに公開したから起きたメリットだ。つまり、イントラネットの真の効力は、この例に見るように企業の壁を超えて情報をオープン化することで、業務の効率アップとサービスの向上を同時に成し遂げられる点にある。

●なぜ今イントラネットか

米国でもこのキーワードを見かけるようになったのは、95年の秋くらいからだと聞いている。それまでは日本と同じように、インターネットフィーバーだった。なぜ今イントラネットなのだろう。

これは私見だが、やはり最初に書いたようにマイクロソフトがウィンドウズ95をもってしても実現できない、PC、Mac、UNIXなどの異機種間操作互換性（インターオペラビリティ）の壁を、WWWがあっさり乗り越えてしまった点にあると思う。そして、ソフトメーカーや先進企業はそれを見逃さなかったからだろう。

それともう1つには、オンラインショッピングだ、コンテンツだと言っても本格的なものを構築しビジネスにするには時間がかかるということではないだろうか。ゼロから作るコンテンツより、むしろ企業がすでに持っている商品データベースなど（コンテンツ）を元にビジネスをした方が早いし、効率もあがると考えるのは当然の成り行きではないだろうか。

●日本でも有効か

ところで、イントラネットを実現するためには、インターネットに接続された企業内LANと、情報データベース、そしてその間を結合するソフトを含めたグループウェアが必要となる。器としてのデータベースシステムやグループウェアに関しては、オラクル社、ネットスケープコミュニケーションズ社、その他メインフレームなどがしのぎを削って開発しており、ユーザーとしてはそれを求めれば問題はない。

日本で最も問題となると思われるのは、LANと情報そのものだと思われる。日本のLANの普及率は欧米に比べかなり低い（昨年の段階で10%台）。おそらく、多くの企業がイントラネットの構築にあたってLANの整備を迫られるだろう。また情報のデー

タベース（デジタル）化については、さらに遅れていると言われている。

しかし逆に、日本はインターネットそのものの普及も遅れており、まだWWWを利用できる人が少なく、企業内ネットワーク構築の方に力点が置かれるかもしれないという予想もある。

どちらにしても、インターネットというオープンな環境でのビジネスを指向するなら、各企業内の情報に対してもオープン化が迫られてくるという認識は間違っているだろうか。イントラネットについてのネガティブな意見として、セキュリティなどの問題がでることが予想されるが、それについてはまた別の機会に考えてみたい。

（井芹昌信 INTERNET Watch「木曜コラム」-
96/3/7、インプレス）





[インターネット白書 ARCHIVES] ご利用上の注意

このファイルは、株式会社インプレスR&Dが1996年～2012年までに発行したインターネットの年鑑『インターネット白書』の誌面をPDF化し、「インターネット白書 ARCHIVES」として以下のウェブサイトで公開しているものです。

<http://IWParchives.jp/>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、データ、URL、名称など)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真・図の作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は掲載されていない場合があります。
- このファイルの内容を改変したり、商用目的として再利用したりすることはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用される際は、出典として媒体名および年号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレスR&D)などの情報をご明記ください。
- オリジナルの発行時点では、株式会社インプレスR&D(初期は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めました。すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接および間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

お問い合わせ先

株式会社インプレス R&D

✉ iwp-info@impress.co.jp